怪物たちの時代

Leviathan:
Era of Monsters

あじびコレクションX

「怪物たちの時代」

Leviathan : Era of Monsters

II. 6月24日(木)-9月21日(火)

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

扉絵『リヴァイアサン』(銅版画:アブラハム・ボス)

英語タイトルにある「リヴァイアサン」とは、1651年にイギリスで出版された政治哲学書のタイトル。そこに掲載された銅版画の扉絵とともに世界的に有名になった。もともとは旧約聖書のヨブ記に登場する無敵の怪物だったが、著者のトマス・ホッブズと銅版画家のアブラハム・ボスは人々の生命・安全を守る主権国家のメタファーとして、この大怪物を思い描いた。
扉絵のリヴァイアサンを見てみると、手に剣(=軍事力)と錫杖(=宗教的な権威)をもった巨人が描かれている。頭には王冠(=権力)をかぶり、身体は300人を超す人々でびっしりと埋め尽くされている。当時、ピューリタン革命の真っ只中にあったホッブズは、この戦乱をおさめる特効薬として、国家権力の集中が必要不可欠だと考えたのだ。
しかし、人類の歴史は、それが非常に危険な賭けであったことを証明している。今回の「あじびコレクションX」では、リヴァイアサンのように不気味な姿をした怪物が登場している。それぞれの作品において、どういうメッセージが隠されているのかをぜひ想像してみてほしい。

血の日曜日事件

《冷戦》の主役はまちがいなく不気味な怪物たちだ。しかし薄闇のなか、その怪物たちの足元で何かをしている人々がいる。中央下部に掲げられ赤・白・紺の布は、タイの国旗「トン・トライロング」。その近くには、銃を構えた兵士たちの姿も描かれている。作者によれば、これは1973年10月14日に起きた「血の日曜日事件」の一幕だという。
1970年代前半のタイは、タノーム首相による軍事クーデターにより議会が解散。1972年には政府への権力集中と共産主義運動を弾圧するために暫定憲法が公布される。こうした状況のなか、1973年10月に市民活動家や学生などからなる憲法要求百人委員会が結成されるが、数日後には共産主義者による政府転覆計画の容疑で13人が逮捕。これに反対するデモ行進がタイ史上空前の50万人規模でおこなわれたのだった。
そして事件は平和裏にデモが解散した翌日に起きる。王宮に向かった一部の急進的なデモ学生隊と武装警察・国軍が衝突し、犠牲者77人、負傷者857人の大惨事をもたらしたのだった。画面の右端に描かれた赤い構造物「ジャイアント・スウィング」は、その現場近くの仏教寺院ワット・スタットに位置し、事件の象徴としてここに描き込まれている。

東南アジアの政治を翻弄した怪物

タイの伝統絵画を学んでいたパンヤーが、なぜこのような政治的な作品を描いたのだろうか。理由のひとつは、パンヤー自身がこのときのデモに参加し、その記憶を脳裏に焼き付けていたからだ。1973年といえばパンヤーはまだ17歳のときである。シラパコーン大学時代にもデモに参加したが、中にはこころよく思わなかった教師もいたという。
もうひとつの理由も、パンヤーの個人的な体験からきている。10歳のとき、彼が住んでいたタイ南部の地域において、共産主義者による武力闘争が激化し、多くの兵士や警察官が殺害されたという。その出来事は、幼い少年の心に恐怖を刻み込んだのだった。
《冷戦》では、その題名のとおり、アメリカなどの資本主義超大国、ソ連・中国の共産主義超大国のメタファーとして、二人の怪物(リヴァイアサン)が画面の左と右奥に描かれている。爬虫類のような迫力のある怪物の姿は、タイ北部の仏教寺院の装飾に着想を得たという。その前で争っているのは、タイやその他の東南アジアの小国の姿だ。実際、1960年代から1970年代にかけての東南アジアは、ベトナム戦争を震源として、資本主義と共産主義のきびしい対立が欧米VS中ソのみならず、共産主義陣営内の中国VSソ連、独裁政権VS反体制派などの様々なレベルで巻きおこった。当時大学生だったパンヤーは、こうした世界の覇権争いとその狭間で翻弄される小国タイの姿を、伝統美術の豊かなイメージを用いて描いたのだった。

資本主義超大国

共産主義超大国

翻弄される東南アジアの国々

時代はそれから半世紀が経とうとしている。冷戦はすでに終わったはずなのに、いまだに強大な権力をもった国家という怪物たちが、自国民や国際社会に対して有形無形の暴力をふるい続けている。トマス・ホッブズが400年前に命名したリヴァイアサンという国家建設の壮大なプロジェクトは、果たして失敗だったのだろうか。自らの体験に基づき表明されたそれぞれの感情とイメージ。ダダン・クリスタントとパンヤー・ウィチンタナサーンの二人の作品は、いまもこの問題について深く問いかける。

[学芸員 / 中尾智路]

展示作品 1

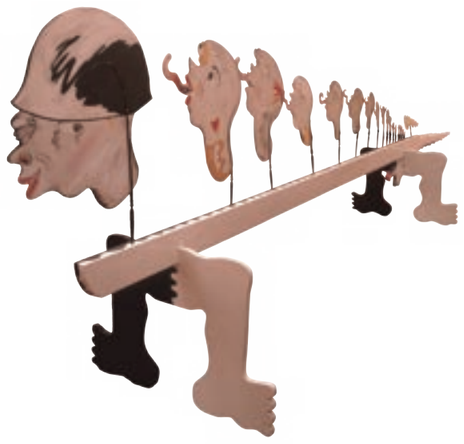
官僚主義

Bureaucracy

[1991 - 1992]

アクリル、鉛筆、クレヨン、インク・合板、木、水牛の角

151.9 × 563.5 × 93.0 cm



作者

ダダン・クリスタント

Dadang Christanto

[1957 - / インドネシア]

この作品《官僚主義》をダダン・クリスタントが制作したのは 1991-92 年。当時のクリスタントはインドネシアのジョグジャカルタを拠点にするアーティストで、年齢は 30 代半ば。ちょうど国際的な注目を集めはじめた時期だった。
それまでのインドネシア美術といえば、1975 年の「新美術運動（New Art Movement）」をかわきりに、現代美術の新しい表現方法が次々と試されていた。1980 年代にジョグジャカルタの芸術大学で絵画を学んだクリスタントは、その次の世代にあたり、社会への切実なメッセージをユーモアに包み込んで表現した。その原点になったのが「ベンケル劇場（Bengkel Theatre）」という進歩的な劇団だった。大学受験に失敗した 1978 年、クリスタントはこの劇団に参加するようになる。昼間は演劇の練習、夜はこの劇団を訪れる各地の野党政治家たちと頻繁に議論を交わしたという。こうした状況のなかで、クリスタント自身も政治・社会活動にのめり込んでいったのだった。

スハルト政権と 9 月 30 日事件

事件後のスハルト少将（右端）

《官僚主義》が制作された 1991-92 年、インドネシア共和国に君臨していたのが第２代大統領のスハルトだった。自らの政治を「新秩序（New Order）」と呼んだスハルトは、強烈な指導力によって経済発展を達成する。しかし、国軍や右派勢力の武力を背景にした身内びいきの独裁政治は、国内外からの強い反発を受けていた。それを象徴していたのが、1965 年の「9 月 30 日事件（*Gerakan Tiga Puluh September* / G30S）」後に起きた惨劇で、クリスタントの人生に癒えない傷痕を残すとともに、《官僚主義》に託された核心的なテーマになったのだった。
なお 9 月 30 日事件とは、インドネシア共産党の指示を受けた中堅将校による軍事クーデターで、その鎮圧を指揮したのが当時陸軍少将のスハルトだった。クーデターを即座に鎮圧したスハルトは、その後事件に関わった共産党指導者のみならず、共産党との関係を疑われた一般住民を大量虐殺する。その数、50 万人とも 100 万人とも言われている。

華僑としてのアイデンティティ

1965 年のある夜、ダダン・クリスタントの父親が強制的に連行され、その後家も焼かれた。父親の消息はいまだ不明だ。インドネシア共産党の支援者に疑われたからだというが、本当のことはわからない。ただ彼の父親は中国人だった。
1965-66 年にわたる共産主義者狩りにおいて、無実の人々が無数に殺害された。特にインドネシアに住んでいた中国人（華僑）はその標的にされたのだった。当時のクリスタントはまだ８歳で、はっきりとしたことは覚えていない。ただこれ以降、自分が華僑だということ、そして 1965 年の被害者だと公言することができなくなったという。それゆえ《官僚主義》のように辛辣な表現をユーモアで包みかくす必要があったのだ。クリスタントにとってアートとは、自分自身の本当の姿や政治的主張を表現することができる「民主主義のプロセス」であり「声なき人のための声」に他ならなかった。

この事件をさらに知るには

ドキュメンタリー映画
「アクト・オブ・キリング (The Act of Killing)」
2012 年 (監督：ジョシュア・オッペンハイマー／米国)

1965 年「9 月 30 日事件」後の共産党員狩りと称した大虐殺を取材したドキュメンタリー映画。当時の虐殺に関わった者たちにインタビューし、その現場を加害者側の視点で再現するという異色の方法をとった。赤裸々に当時の話をする男たちも衝撃的だが、現在でも誰も処罰されず、政治活動に関与しているという現代のインドネシア政治の病巣を鋭くとらえた問題作。ダダン・クリスタントのような 9 月 30 日事件の被害者家族が、どういう惨劇に巻き込まれたのかがわかるだろう。

官僚主義という怪物

《官僚主義》の一番大きな頭部が軍人、おそらくスハルトを暗示しているのは明らかだろう。では、この不思議な姿は、どのような生物から想像されたのだろうか。作者の声を聞いてみよう。
「私の想像では、官僚主義はトカゲのようなものだった。男らしい、マッチョな男のトカゲで、好色でワイルドな感じ。それゆえ軍の官僚たちは皆、長い舌を持っている。彼らの日常生活では、お互いに舐め合って服従しなければならない。互いに舐め合うことで、服従と従順さを示すために。」
「インドネシア語では、トカゲのことを［*kadal*］と言う。また［*kadaling*］という言葉もあって、これは［騙す］という意味になる。」
またクリスタントは、この怪物を造形化するために、インドネシアの影絵芝居ワヤン・クリの人形を援用している。薄笑いを浮かべる男たちの顔、そして長い胴体。その反対側へ回るとまるで昼夜が逆転したように色が無くなる。それは影絵芝居の光と闇、あるいは人間の光と闇を暗示しているのかもしれない。

展示作品 2

冷戦

The Cold War

[1979]

テンペラ・紙

103.8 × 160.1 cm

作者

パンヤー・ウィチンタナサーン

Panya Vijinthanasarn

[1956 - / タイ]

《冷戦》と名付けた作品を描いたとき、作者のパンヤー・ウィチンタナサーンはまだ大学４年生だった。バンコクにあるシラパコーン大学といえば、イタリア人彫刻家のコッラード・フェローチ（シン・ピーラシー）によって 1943 年に設立されたタイ随一の芸術大学。その学生とはいえ、当時 23 歳の若者がこのような作品を完成させたことは周囲に衝撃を与えただろう。一年後、学生の作品としてはただ一人、インドネシアでの国際美術展に出品された。
この作品を制作する前年の 1978 年、シラパコーン大学にようやく伝統的なタイ美術学科が新設された。その２期生だったパンヤーはテンペラを用いた伝統的な絵画技法を習得し、サー紙を用いるようになったという。サー紙とは自然に剥がれ落ちた桑の樹皮から作られた手すき紙のことで、普段は小作品にのみ利用される。パンヤーはそれを初めて大きな絵画にも用いた画家だった。
このような実験的な試み、そして同時代の空気を映した作品と圧倒的な技術力によって、その後パンヤーは「タイ新伝統絵画」の旗手と目されるようになるのだった。